

第十六部会

Oxford Group Movement の活動と影響

葛 西 賢 太

Oxford Group Movement (以下 OGM) とは、二〇世紀初頭に英国・米国で始まった、キリスト教系の道徳改革運動である。オックスフォード大学の学生が目立ったために、初期にはこのように呼ばれたが、大学団体との混同を避けるため Moral ReArmament と改称、二〇〇一年以降は Initiatives of Change とさらに改称して、現在に至っている。なお、英国国教会の改革運動である Oxford Movement とは別物である。

この運動は、罪を詫びることを核におく心なおしの儀礼をもっており、三つの点で興味深い。第一に、心なおしに応答する他者を指定して、モチベーションを高めることにより、倫理の再強化を目している点。第二に、担い手たちが戦後日本の政財界に少なからぬ影響を及ぼしている点。第三に、担い手たちの活動を促進する心なおしの意義である。なお心なおしとは、新宗教の日常的な倫理実践として島蘭進が注目した側面である。筆者は、「何らかの悩みを抱えた心を、単なる原状復帰や症状の治癒や心の健康ではなく、人間を超越した存在の力を借りて、より高い段階、完成へと向上させると信じられている実践」と定義する。報告では、心なおしの事例にも言及する。

第一の、心なおしの手順について説明する。(一)正直、純潔、無私、愛の四つの「絶対」あるいは「標準」を基準に、自分の生活を内省、頭に浮かぶことすべてを書き留める。(二)その内容を「誰か友人と話し合う」(Sharing) のだが、その際に留保はせず、すべてを出す。(三)上述の四つを基準にして、自分が特定の誰かをどのように傷つけているかを考えて罪を自覚し、それをリストに書きとめ、相手に許しを請い、償い (Restitution) をする。告白や償いをまとめ、詫びの手紙を書くことが重視される。この償いが、相手にも罪を自覚させ、相手の改変 (Change) をもたらすことも多く、これは OGM の勧誘手段にもなっている。(四)日常生活において神を身近に感じながら生きることを習慣づける。

神を身近に感じることに、頭に浮かぶことをすべて書き留めることは、心なおしの儀礼の中核をなし、導き (Guidance) と呼ばれる。静謐な時間を持ち、課題や問いを神に向かって投げかけ、頭に浮かぶことを、それに対する神からの答え (導き) であると考え。見方を変えれば、心なおしの儀礼において、人間の側の道徳的意思や道徳的行動に対して、人間以外にも応答する他者が指定されているのである。OGM の四つの「絶対」は抽象度の高い理念のようだが、個人の具体的な罪責感を知悉し反省に個別に応答する他者として「神」を考えると、理念は具体性を帯びる。このことにより、心なおしを超越的な根拠に結びつけ、モチベーションが高められる。この心なおしの実践者を増やすことにより、社会倫理の再強化を目指す。

第16部会

導きの超越的根拠については、その内容が、本人がすでに持つ倫理観を踏襲している可能性もある。また、導きが恣意的になる危険もある点に、注意を喚起しておく。

第二の、戦後日本との関わりを述べる。日本においてこの運動が盛んになったのは一九四〇年前後と、終戦後一九七〇年代頃までである。戦前はキリスト教的倫理運動の面がもっぱら目立つが、戦後はOGMの国際的なネットワークを活かした超宗教的活動が多くなる。OGMは、ドイツと日本も含めた新しい世界の建設を提唱し、政財界の有志青年が海外の政財界人と交流する機会を用意し、日本の諸国との国交回復にも重要な役割を果たしたとみられている。

第三に、これらの担い手たちのモチベーションを高めるものとして、心なおしが存在していた点を強調しておく。海外で学ぶためだけに、また海外の情報を得るためだけに参加した人々も、心なおしに感化され、熱心に活動に参加するようになっていったのである。

西田天香の宗教教育論

河村新吾

一 はじめに

本提案では、新たな宗教教育論を模索するものである。二〇〇六年教育基本法は改正され、これまでの規定にあった「宗教

に関する寛容の態度」及び「宗教の社会生活における地位」に加えて、新たに「宗教に関する一般的な教養」を教育上尊重すべき旨が盛り込まれた。それに伴い、学習指導要領上も宗教教育の充実が予想される。今後どのような宗教教育が、学校教育において必要とされるのであろうか。

二 西田天香と一燈園

西田天香（一八七二—一九六八）が始めた一燈園という共同生活は、一九〇四年から始まり現在に至っている。その特色は、「自然にかなった生活をすれば、人は何物をも所有しないでも、また働きを金に換えないでも、許されて生かされるという信条のもとに、つねに懺悔の心を持って、無所有奉仕の生活を行っているところだ」（<http://www.itoen.or.jp/index2.htm> 一燈園のHPより引用）とある。その教育機関である一燈園は、小学校から高等学校までの一貫校である。当初は、一燈園に属する同人のための施設であったが、現在ではそれ以外の子弟も広く受け入れを始め、高等学校からは、全員寮生活を営んでいる。礼堂における朝の「祈り」から小中高等学校生活が始まったり、高等学校のいわゆる修学旅行では、トイレ掃除のために家庭訪問をしたりするという宗教的雰囲気のある教育実践が行われている。

毎年十一月に「秋の学習発表会」として、小中高等学校が礼堂でいわゆる文化祭を行う。二〇〇八年度の発表会では、小学校三四年生合同でジュール・ベルヌ作の「十五少年漂流記」が演じられた。それに焦点化して、懺悔の心について考察してみたい。